

「男、突っ走る！」

第44回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (20)	福沢 瑞枝 (20)	加藤 直也 (20)	大久保 正樹 (24)	船倉 篤志 (20)	奥村 裕司 (21)	安永 和也 (20)	本部 明美 (19)	吉野 茉由 (26)	堀内 泰正 (58)	藤野 真弓 (20)	清村 有菜 (20)	安本 真苗 (55)	桑島 百合子 (49)	佐伯 康太 (46)
名古屋芸術専門学校2年生	名古屋カフェ調理専門学校1年生	名古屋芸術専門学校入学事務局員	名古屋芸術専門学校講師	中央高校元生徒 自主ドラマ出演女優		『スクエア・トラスト』代表取締役社長	『スクエア・トラスト』社員	『スクエア・トラスト』社員						

1 東京・ビル街

人の行き交いが激しい。

2 同・とあるビル・全景

3 同・テナントの一室

瑞枝と直也のインターンシップ先。

社員たちが、パソコンでCGの制作を

している――その中に交じって瑞枝と

直也も仕事をしている。

社員Aが瑞枝のところへやってくると、

書類を渡し、

社員A「福本さん、こっちの作業もお願い」

瑞枝「分かりました」

社員B、直也のパソコンを見ると、

社員B「加藤君。ここはね、もう少し細かく

モデリングしたほうが良いよ」

直也「はい、ありがとうございます」

4 同・表（夜）

瑞枝と直也が出てくる。

直也「今日も一日終わったね」

瑞枝「あと一ヶ月で、インターンも終わりか」

直也「長かったような、短かったような」

瑞枝「そうだね。でも、良い経験にはなった

よね」

直也「ああ」

瑞枝「でもやっぱり、私は早く学校に戻りたいな」

直也「俺たちの代って、本当に学校が好きな奴が集まってるよな。誰かしたら常に学校にいるし、大体夜のクローズ時間までずっといるし」

瑞枝「それがみんなの良いところじゃん」

直也「まあ、そうだけどさ」

瑞枝「早く会いたいなあ、みんなに」

5 名古屋芸術専門学校・全景（朝）

6 同・4階・401教室

雅也がカメラ機材の準備をしている――  
側には『自主ドラマ 誓います。』  
と書かれた製本台本が置かれている。

正樹が入ってくると、

正樹「おはよう」

雅也「おはよう。機材は、これで大丈夫か

な？」

正樹「OK。下に俺の車停めてある。順番に  
運ぼう」

雅也「分かった」

と、正樹と共に機材を運び始める。

7 清水駅・高架下

正樹の車から機材を下ろしている雅也

――手伝っている正樹。

と、学生たちが何人か合流してくる。

学生たち「おはようございます」

正樹「おはよう」

雅也「おはよう」

正樹「（学生たちに）カメラセッティングし

て」

学生たち「はい」

と、慣れた手つきでカメラのセッティングを始める。雅也、見よう見まねで手伝っている――そこへ、出演女優・

清村有菜（20）がやってくる、

有菜「おはようございます」

一同「おはようございます」

正樹「おはようございます。監督とプロデューサーを担当する大久保正樹です。よろしくお願ひします」

有菜「花村京子役の清村有菜です。よろしく

お願ひします」

正樹「木内、ちよつと来て」

雅也「はい」

正樹「（有菜に）脚本の木内です」

雅也「脚本を担当しました木内雅也です。今日からよろしくお願ひします」

有菜「清村有菜です。よろしくお願ひします」

正樹「準備しますので、もう少しお待ちくだ

さい」

有菜「はい」

と、高架上のホームに電車がやってくる――改札の階段から、真弓が降りてくる。

真弓「おはようございます」

学生たち「おはようございます」

正樹「おはようございます。監督とプロデュ

ーサーを務めます大久保正樹です」

真弓「藤野真弓です。よろしく願います」

雅也「(感嘆と)久しぶり、真弓さん」

真弓「ツリーイン、久しぶりッ……」

正樹「ツリーイン……、あ、そういうことか」

雅也「高校の時にそうやって呼ばれたの。

(と真弓に) 本当にお久しぶり。まさかこんな形で再会できるなんて思わなかった」

真弓「私も。専門学生の自主制作のドラマがあるから出てみないかって声かけられたんだけど、まさか脚本がツリーインだなんて思わなかった」

雅也「俺も写真見た時、びっくりした。看護  
学校に行ったって聞いてたから、まさか読  
者モデルやってるまでやってるとは知らな  
かったらね」

真弓「本当、世間は狭いね」

雅也「ねえ」

真弓「覚えてる？ 高校の卒業式の時……」

8 中央高校・生徒会室（第30 話の回想）

真弓「私、応援してるから。それに、いつか  
ツリーインの作品にも出てみたいし。約束  
だよ」

雅也「うん」

9 清水駅・高架下（回想戻り）

雅也「覚えてる。まさかこんなに早く、実現  
するなんて思わなかったけど」

真弓「うん。だからね、今回読者モデル繋が  
りで来た話だったけど、これも縁だと思っ  
て、頑張って演じようと思う」

雅也「うん、ありがとう」

正樹「準備できました。カメラリハやりますので、こちらへ」

有菜・真弓「はい」

と、カメラの前にスタンバイをする――  
見守るように真弓を見つめる雅也。

10 木内家・全景（夜）

11 同・居間

雅也が肉じゃがを作っている。

× × ×

完成した肉じゃがを、袋に詰めている  
雅也――マジックペンで、メッセージ  
を書いている。

12 東京・アパート・一室

直也が漫画を読んでいる――インター  
ホンが鳴る。

直也「はい？」

配達員の声がする。

配達員の声「冷凍便のお届けです」

直也「冷凍便？」

13 同・マンション・一室

瑞枝が雑誌を読んでいる——インター

ホンが鳴る。

瑞枝「……？」

14 同・アパート・一室

箱を開ける直也——メッセージの書か

れた肉じゃがの入った袋を手にする。

雅也の声「加藤へ 肉じゃが作りました。イ

ンターン終了まであと一ヶ月。頑張っ

たまには、遊ぼう。うちーより」

直也「（笑って）あいつったら」

15 同・マンション・一室

肉じゃがを入れた器を電子レンジで温

めている瑞枝——チンが終わり、器を

取り出すと、スマホで肉じゃがの写真を撮る。

瑞枝「いただきます」

と、肉じゃがを食べ始める――台所には、肉じゃがの入った袋が置いてある。

雅也の声「みずちゃんへ 肉じゃが作りました。インターン終了まで、残り一ヶ月だね。帰ったら、ご飯行こう。うちーより」

瑞枝「おふくろの味がする……。うちー、男なのに（と微笑む）」

16 名古屋芸術専門学校・2階・教務室

（朝）

雅也、和也、吉野がミーティングを終える。

吉野「では、今日のオープンキャンパスもよろしく願います」

雅也・和也「よろしく願います」

17 同・1階・ロビー

雅也、和也、吉田が出てくる——明美、  
その他カフェ調理専門学校の学生たち  
がやってくる。

明美たち「おはようございます」

雅也「おはよう。明美ちゃん、最近よくシフト入ってるじゃん」

明美「この間のキャンプから、学生スタッフが楽しくなって、シフト入れてもらってるんです。先輩だって、いつもいるじゃありませんか」

雅也「そりゃ、学生スタッフは俺の天職だからね」

和也「自分が受けてないッ授業もの説明もできると、校舎見学も完璧なんだから」

明美「レジェンドっすね」

和也「そんなことないわ」

吉野「ある意味、ベテランポジションよね」

雅也「何をおっしゃいますか」

と、正樹が登校してくる。

正樹「（雅也を見て）おはよう、花村京子さ

ん」

雅也「だから、ヒロインの役名をニックネームにして呼ばないでくれる」

正樹「じゃあ、ツリーイン」

雅也「何か専門のメンツにそれ言われると恥ずかしいんだよね」

正樹「まあ、何でも良いや」

雅也「撮影素材、どうだった？ この間クラックアップしたけど、追加撮影とかは大丈夫そう？」

正樹「素材は一通り確認して、問題はなかったよ。後は、ひたすら編集作業だ」

雅也「時間かかる作業かもしれないけど、お願いします」

正樹「任せろ（と中へ入っていく）」

和也「（案内ボードを渡すと）うちー、これよろしく。俺、八階まで案内してくる」

雅也「はいよ」

和也、体験入学の高校生をエレベーターへ誘導していく。

雅也「（通行人たちに）オープンキャンパス  
やってます。受付はこちらです」

明美「こんにちは。オープンキャンパスの受  
付は、こちらです」

18 同・4階・401教室

正樹がパソコンで編集作業をしている。

19 同・1階・ロビー

オープンキャンパスに来た高校生たち  
の対応をしている雅也、和也、吉野。

20 同・全景（時間経過）

21 同・2階・教務室

雅也と和也が入ってくる。

和也「今日は意外と高校生多かったね」

雅也「当日飛び込みの高校生とか、友達と一  
緒に来たっていうパターンもあったからね」  
と、席に座ると、雅也の鞆の上にタッ

パーが置いてあることに気が付く。

雅也「ん、何だろこれ？（と蓋を開けると）  
シュークリーム？」

物珍しそうに、タツパーに入ったシュー  
クリームを見る雅也と和也——と、

吉野が入ってくると、

吉野「ああ、それさっき、本部さんが持って  
きたよ。木内先輩につて」

雅也「明美ちゃんが？」

吉野「オープンキャンパスで作ったお菓子の  
余利だつて言つてたよ」

和也「おッ、ついにうちーも……」

雅也「んなわけないでしょ。ただ、余り物の  
処分に困つたから」

和也「でも、それだったら向こうで完結させ  
れば良いじゃん。何も、わざわざうちの校  
舎まで持つてくることないでしょ」

吉野「それもそうだよね」

雅也「やめてくださいよ、吉野さんまで」

と、笑つてごまかす——スマホのL I

NEの通知が鳴り、画面を見る雅也。

真弓からのLINEである。

真弓の声「この間はお疲れ様。思いがけず、ツリーインの脚本のドラマに出演できて、すごく嬉しかった。完成を楽しみにしています。これからも頑張ってくださいね。応援してるよ」

和也「うわさの本部さんから？」

雅也「違います」

ムツと苦い顔をする雅也。

22 木内家・全景（夜）

23 同・雅也の部屋

雅也がパソコンで原稿を書いている――手を止めて背を伸ばすと、出ていく。

24 同・居間

雅也が冷蔵庫からタッパーを取り出し、シュークリームを一つ手にして食べる。

雅也「美味しい。あ、コーヒーいれよう」

と、マグカップにインスタントコーヒ  
ーを入れる。

25 名古屋芸術専門学校・全景

26 同・屋上

裕司が煙草を吸っている——側に篤志。  
裕司「今週が終われば、もう前期も終わりか」  
篤志「夏休みなんて、あつという間に終わっ  
ちやったし、今週と二週間の秋休みが終わ  
ったら、もう後期スタート。とうとう学校  
生活も折り返し地点だよ」

裕司「早いなあ」

篤志「早すぎる」

27 同・5階・502教室

堀内の授業中——それぞれパソコンで  
作業をしている学生たち。

雅也が堀内と面談をしている。

雅也「え……『栄新名所図絵』の編集長を、

僕がですか……」

堀内「今年から、各編集部は学生主体にしよ  
うと思っただけ。新学期が始まってすぐの講  
師会で、そういう方針を決めたんだ。もち  
ろん、講師陣でバックアップはする」

雅也「……」

堀内「大変かもしれないが、ここでの経験は  
必ず就活やデビューでも有利になるだろ」

雅也「……分かりました。いろいろ、苦戦す  
ることもあるかもしれませんが、やってみ  
ます」

堀内「よろしく頼むぞ」

雅也「はい」

堀内「あ、それと木内。これ知ってるか？」

と、一枚の紙を見せる。『なご弁新聞』  
と書かれたフリーペーパーである。

雅也「『なご弁新聞』……？」

堀内「この間、この新聞の編集をしている人  
と知り合ったんだ。せっかくだと思って、  
うちの学校の話をしたら、バックナンバー

もあるから是非一度見てほしいって言われたんだ。そこに載ってる連絡先に問い合わせせて、詳細聞いてくれないか」

雅也「お遣いってことですか？」

堀内「まあ、そんなところだ」

雅也「分かりました。一度、問い合わせてみます」

28 同・全景（夜）

29 同・4階・402教室

雅也が首を上に向けた状態で眠っている――ゆっくりとドアが開き、誰かが雅也のでこを叩く。

雅也「痛ッ……」

と、目を覚ますと、瑞枝が立っている。

雅也「（ハツとなって）みずちゃんッ……」

瑞枝「ただいま」

雅也「おかえり。そっか、もうインターン終わってたんだ」

瑞枝「うん。(と小さい袋を渡し)はい、東京最終日にデイズニー行ってきたから、お土産。肉じゃがのお返しだよ」

雅也「ありがとう。(と袋を開けると)あ、ダツファイアのシャーペンだ」

瑞枝「うっちー好きそうかなと思って」

雅也「ありがとう」

瑞枝「肉じゃが美味しかったよ」

雅也「それはどうも。久しぶりに作ったから、どうかnaと思っただけだ」

瑞枝「おふくろの味がして、美味しかったよ」

雅也「誰がおふくろだよ。でも、好評ならまた何か作っちゃおうかな」

瑞枝「楽しみにしてる」

笑い合う雅也と瑞枝。

30 道(数日後)

雅也がスマホの地図を見ながら歩いている。

雅也「栄二丁目って、ここだよな」

と、歩いていると、ビルの一角にある  
看板『株式会社スクエア・トラスト』  
を見つける。

雅也「あつた、ここだ」

31 『スクエア・トラスト』・事務所

女性社員・桑島百合子（49）からお  
茶を出される雅也。

桑島「どうぞ」

雅也「ありがとうございます……」

桑島「（名刺を出して）の桑島と申します」

雅也「（名刺を出して）名古屋芸術専門学校  
シナリオライター専攻の木内と言います」

と、男性社員・佐伯康太（46）がや  
つてくると、名刺を出して、

佐伯「『なご弁新聞』の記者を担当している  
佐伯と言います。堀内先生には、先日ご挨拶  
をさせていただきました」

雅也「（名刺を出して）名古屋芸術専門学校  
シナリオライター専攻二年の木内です。堀

内先生から、お話は伺ってます」

桑島「社長はもうすぐ戻りますので、しばらくお待ちください」

雅也「はい」

と、社長・安本真苗（55）が帰社すると、

安本「戻りました」

桑島・佐伯「お帰りなさい」

桑島「社長、『なご弁新聞』を見たいという学生さんが見えています」

安本「（雅也に名刺を出して）こんにちは。

『スクエア・トラスト』代表の安本真苗です」

雅也「（名刺を出して）名古屋芸術専門学校シナリオライター専攻二年の木内です。お忙しい中お時間いただき、ありがとうございます  
います」

緊張の面持ちで安本を見る雅也。

つづく